講　演

日韓文化交流基金　シリーズ講演会2010　日韓文化交流の〈きのう・今日・明日〉

第1回　ハングルの誕生 ―音（おん）から文字を創る―（抄録）

当基金では今年度“日韓文化交流の〈きのう・今日・明日〉”というテーマのもとで、シリーズ講演会を開催しています。第1回目は、『ハングルの誕生』（平凡社新書、2010年）の著者である野間秀樹先生に、ご自身の著書についてお話しいただきました（2010年9月24日（金）、日韓文化交流基金会議室）。なお、同書により、野間先生は第22回アジア・太平洋賞大賞を受賞されました。

私が『ハングルの誕生』で申し上げたかったことは、ハングルは面白い、凄い、そして深い、ということです。ハングルを見ると、漢字やかなやローマ字も見える。文字だけではなく、人間にとって文字とは何か、言語とは何か、知とは何か、といった、非常に大きな問いを問うことになる。〈ハングル〉の思考を〈知〉の広野に解き放ちたい、というのが、『ハングルの誕生』にこめた私の願いです。

〈訓民正音〉の登場

〈ハングル〉は、15世紀の朝鮮半島で、世宗大王と集賢殿に集った若き秀才たちが目的意識的・人工的に作った文字体系であり、『訓民正音』という驚嘆すべき書物で歴史の中に現われます。

『訓民正音』解例本

朝鮮王朝時代に、朝鮮語は、〈話されたことば〉としてのみ存在し、〈書かれたことば〉としては存在していませんでした。書かれた歴史の時代を貫いて、朝鮮半島にあっては、〈文字〉とはすべて漢字であり、〈文〉〈文章〉というのは漢文のことでした。これが、〈正音〉＝ハングルの出発点です。

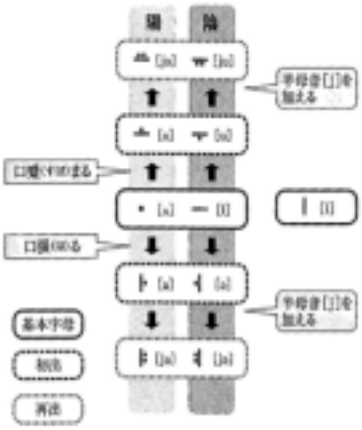
漢字にあっては、「形」が、ある「音」と結びつき、それが指し示す「義」と結びついているという関係が、〈形音義〉のトライアングルとして成り立っています。〈正音〉を作るとき、世宗らはこうした漢字のスタイルはとらず、まったく新しいやり方をとることにしました。それは、〈音〉＝言語音をつぶさに見て、そこから文字を作り出すということでした。

20世紀言語学では、発せられた言語音から単位をいかに切り出すかという問いに対し、〈音素〉という概念の発見で答えました。〈音素〉とは、単語の意味を区別する最小の音の単位のことです。たとえば、日本語の「出る」と「照る」という単語で、意味を区別しているのは/d/と/t/の子音の違いだけです。このとき、日本語では/d/と/t/を音素として取り出すことができます。そして驚嘆すべきことに、15世紀朝鮮の〈訓民正音〉は、20世紀言語学を迎えてたどりついた〈音素〉へと、ほとんど到達していました。〈正音〉で字母として一つ一つ形を与えた音の単位が、今日私たちが〈音素〉と呼ぶ単位だったのです。

子音字母に与えられたかたちは、その子音が発音されるときの音声器官の〈かたち〉を〈象形〉したものです。『訓民正音』解例本には、「〈正音〉二十八字、各其の形を象る（かたど）」とあり、具体的に口の中の形が、微に入り細をうがって書いてあります。また、加画の原理によって、同じ唇の形や舌の位置から派生した音には、基本となる形に画を加えてシステマティックに表しています。〈正音〉には音のかたちが棲んでいる、といえます。

子音字母の〈かたち〉の派生の体系

一方、母音字母は、「天地人」を象って作り、陽母音は上または右に点、陰母音は下または左に点を置き、陰陽の対立がわかるようになっています。15世紀朝鮮語にあっては、「나」na（私）のように陽母音で終わる単語には、「は」にあたる助詞「ㄴ」nへnも陽母音から



母音字母生成の仕組み

なるものを用います。「너」nə（おまえ）が陰母音だと、「は」にあたる助詞「는」nɨnにも陰母音が来ます。これを「母音調和」と言いますが、文字の上でもその仕組みがわかるようになっています。

〈正音〉エクリチュール革命

『朝鮮王朝実録』には、崔萬理という人物らが正音に反対した上疏文があります。「中国の制度・文物に則って生きてきた朝鮮の生きる道に〈正音〉のあり方は反している」というその内容を以って、近代の学者たちは崔萬理を事大主義者と批判していますが、それは上疏文の政治的な側面しか見ないやや早計な批判だと思います。

崔萬理ら王朝を支える知識人たちは、漢字漢文により名を与えられ、友と文や詩を交換し、科挙も、王が死を賜う命令書も、死してのち許されるのもすべて漢字漢文でした。そして、崔萬理らの思想は、〈正音〉について、優れて言語学的・文字論的に、広く知の地平から問いを立てていることも、見逃してはならないと思います。正音の潜在力が漢字漢文エクリチュール（仏語：écriture、文字・書かれたもの、書法、書く行為、の意）の根幹を揺るがすような内容を持つものであったがゆえに、漢字漢文を原理主義的に理論化しようとしたのが崔萬理たちの思想であるといえます。

侵すべからざるものとしてあった漢字漢文により、ありとあらゆる〈知〉が形象化されてきたゆえに、いかに王といえども、知の根幹に抵触することは許されない。よって、「用音合字」という、音の一つ一つに形を与えて一文字を形成するような〈正音〉のシステムそれ自体に対し、必死に異議を申し立てているのです。生きた細胞・有機体たる一文字一文字が意味をなす。そうした漢字が知をつくるのに対し、正音は細胞であるべき文字を、音節たる分子に、分子は音素たる原子に解体し、無機的なエレメントに解体してしまっている。言語学的に言えば、形態素は音素に解体すると意味を実現しなくなるということです。そんなことをすると、知が、エクリチュールが崩壊するではないか、と。

それに対して、〈正音〉創製の中心メンバーである鄭麟趾は、『訓民正音』解例本の跋に言います。「天地自然の声有れば、則ち必ず天地自然の文有り」。そして、次のことばこそ、渾身のエクリチュール革命宣言といえるでしょう。「風声鶴唳（ふうせいかくれい）、鶏鳴狗吠（けいめいくばい）と雖も、皆得て書くべからん」—風のそよぐ音も、遠き鶴の鳴き声も、夜明けを告げる鶏の鳴き声も、そして犬の遠吠えさえも、ことごとく正音の表せないものはない。どうだ、かつて漢字で朝鮮語のオノマトペ（擬態擬声語）まで表せたか？

つまり、朝鮮語のオノマトペを表すためには、漢字を借りるのではなく、どうしても〈用音合字〉というシステムでなければなりませんでした。漢字は鶴の形を象形することは得意ですが、その声を表すことはできません。朝鮮語の表現の中に豊かに含まれ、朝鮮の地の声・ことばを表すオノマトペこそ、〈用音合字〉の優位を圧倒的な形で示すことができるものだったわけです。

普遍への契機としての〈訓民正音〉

この本の結びにこのように書きました。「〈訓民正音〉とは、ことばとは何か、文字とは何か、人間にとって文字とは、エクリチュールとは、知とは何かといった普遍へと導いてくれる、稀有なる奇跡である」。従って、〈訓民正音〉というのは韓国語という一つの言語圏だけの財産にとどまらない、誰もがそれを共にしうるものではないかと思うのです。

言語がコミュニケーションの道具だから社会的なのだというよりも、人がことばを有することそれ自体が圧倒的に社会的なのです。ことばというのはその原理的なあり方自体が〈学び＝教えつつ〉存在するものであり、これは話されたことばも書かれたことばも同じです。

1446年にできた『訓民正音』解例本は、木版の袋綴じになっていて、その一部の裏に『十九史略諺解』が墨書されていました。ある時は、裏返して製本しなおして、『十九史略諺解』の裏のテクストとして、『訓民正音』解例本は500年を生き抜いてきました。それが慶尚道安東の旧家で1940年に発見されたときは、製本しなおされて表になり、女性たちのハングル教育に用いられていました。みんなで輪になってこの本を見ながら、これが「a」だ、などとやりながら、ことばを、文字を学ぶ歓びといったものを、一人一人が感じていたことでしょう。『訓民正音』解例本というのは、文字通り〈学び＝教える〉という日常の中に存在しており、これこそまさに〈正音〉エクリチュール革命を担った人々の志であり、世宗の夢だったといえるのではないかと思います。『訓民正音』解例本は、奇跡的に残って、私たちの前にあります。それは肌触りを有し、質量を有し、香りを有するようなテクストとして存在していました。〈訓民正音〉とは、ユーラシア東方の極に現れた、エクリチュールの奇跡なのです。

PROFILE 野間 秀樹（のま ひでき）

1953年生まれ。専門は朝鮮言語学、日韓対照言語学、韓国語教育。著書に『ハングルの誕生』（平凡社新書）、『韓国語 語彙と文法の相関構造』（ソウル、太学社）、『新・至福の朝鮮語』（朝日出版社）、『絶妙のハングル』（日本放送出版協会）などのほか、編著書に『韓国語教育論講座』（全4巻、刊行中、くろしお出版）。2005年大韓民国文化褒章受章。また、美術家としての活動もある。1996～97年ソウル大学校韓国文化研究所特別研究員。前東京外国語大学大学院教授。